

『絵入日用 女重宝記』について

今井秀和

一、はじめに

『女重宝記』は、女性が日常生活を送る為に必要となる知識を記した心得集であった。元禄五年（一六九二年）に苗村丈伯編の原刻版が刊行され、それ以後も履刻・改刻を繰り返して、また増補されて少しずつその内容を変化させていった。

当論考で扱うのは、弘化四年（一八四七年）版の高井蘭山編・応為栄女画『絵入日用 女重宝記』である。『絵入日用 女重宝記』に含まれる二種類の胎内十月図について、また『女重宝記』と他の様々な書物との関係性について考察を進めていく。また、これらについて論じた後に、該当部分の翻刻を載せる（二三之巻 くわいにんの巻子のそだてやうの内、懐胎・出産に関わる「○懐妊の事ならびに養生の次第」「○懐妊か懐妊にあらぬかを知事」を翻刻）。

二、『絵入日用 女重宝記』に含まれる二種類の胎内十月図

『女重宝記』二三之巻にある出産図の上部には、元禄五年の原刻版の時点から、いわゆる胎内十月図（受胎から出産に至るまでの十ヶ月間の胎児の様子を、主に密教的モチーフになぞらえて解説した図）が使われている。『絵入日用 女重宝記』では、同様の図を用いながらも、本文において初めてその内容に否定的な見解を示している。その理由については後述することとし、まずは胎内十月図についてふれる。

『女重宝記』における胎内十月図の直接的前身かと目される図を有する書物に、『生下未分語』がある。『生下未分語』は正保四年（一六四七年）刊で、刊行者不明。同書に関する、桜井由幾氏の解説を引く。「本書は密教の神仏習合思想と陰

陽五行・五臟六腑・九曜説の中国医学の説を取り混ぜて、男女の性、性交渉、妊娠、出産の神秘性を説く啓蒙書の一つである。(中略) 天地・日月・胎蔵界金剛界・男女などの二元論で夫婦和合を理論化し、女性の胎内での胎児の成育を各月々に相応する仏の力の結果として述べている。(中略) 性交渉の境地を悟りの境地に重ねる密教的神道の中世以来の流れが伊勢神道系の一部の教説に近世まで伝えられていたが、本書も、単純ではあるがその影響下にあると思われる^①。

『生下未分語』では、胎児の毎月の様子が一つ一つ別々の図版として本文の間に挟み込んであるが、『女重宝記』ではこれらにそっくりな図が横一直線に並べられ、一枚の図版の中に構成され直されている(該当の図版は上下二分劃の画面構成となっており、上部が胎内十月図、下部が屋敷内における出産場面となっている)。

『女重宝記』の胎内十月図は『生下未分語』を参考にして作られた可能性が高く、相互の中間に位置すべき資料が見当たらない現在、胎内十月図の成立を考える上でも『生下未分語』の資料的価値は高い。

さて、今回翻刻の『絵入日用 女重宝記』にも、『女重宝記』元禄五年版からほぼ変わらぬ構図の出産図があるのだが(図一)、加えて、より現実に即した胎児の図も収録されている(図二)。また、それに伴い本文にも変化が見られる。前述のように、それまでの版では無批判に採用していた胎内十

月図に対して、初めて否定的な見解が示されているのである。これには、『絵入日用 女重宝記』の編者が高井蘭山であることが影響している。高井蘭山は読本作者であり、名は伴寛(蘭山は号)。江戸芝伊皿子御組屋敷の与力であった。読本作者としては『絵本三國妖婦伝』(初編享和三年(一八〇三年)刊)等を著わしたが、同時に一生にわたって簡便な俗解書の類を多く編んだ^②。

その中の一冊、文化十二年(一八一五年)に発行された高井蘭山作『姪事戒』(江戸・須原屋茂兵衛板)には「胎内十月の間の形。独鈷錫杖等の仏具に始り。胞衣に蓮の葉を被り。形体具ては倒達^{たて}に立るなど。佛師の説に因^{もつ}て設る^{もつ}図にして。大に婦女を愚^ぐにすと云べし。真の論をたづぬべきは。儒書医書によらずんば得べからず。」とある。同書ではさらに、わざわざ「佛師の説」に基く胎内十月図を模した上で、独鈷等の図を使わずに、より写實的に胎児の発生を描いて「佛師の説」を否定している。これが後に、ほとんどそのままの形で『絵入日用 女重宝記』に使われることになる。

以下に、『姪事戒』の影印本(「姪事戒」江戸時代女性文庫76)大空社 一九九八年六月)の内、図版に付属する解説部分のみを翻刻する。

初月の図 一點の白露を。草の葉に。とめたるごとく。燭

を乗て風中にあるが。風紫しければ止らざるごとし。子宮にあつて。いまだ腹に入らず

二月の凶

陰門の裡六寸にあつて腹に入れども。いまだ眞の處に居ず。其形桃花の初て綻るごとし

三月の凶

其形凝る血のごとく。蚕の繭に似たり。漸々圓になつて臍を生ず。其居る前は前に同じ

四月の凶

手足わかれ。始て形を成す。母の臍に入て。眞のところもあり。臍下丹田に居する也。此月

より別して邪味を食せず。胎教をなすべし

五月の凶

男女こゝに至て定る。男胎なれば。其母酸ものをこのみ。女胎なれば。甘ものを好む。夜の五

更に母の臍下に在て。男は左女は右に転ず

六月の凶

毛髪を生じ。男魂降て其左を動し。女魂降て其右を動す。此ゆへに母の腹中漸々動き。魚の水中

におよぐがごとし

七月の凶

七の竅ひらき。乳味の甘を覚耳に音を知り。眼に光有。鼻に氣有。其母路をゆくに難り。此に

至て自然に人の体をぞ足す

八月の凶

小児の腹内に精神そなわり。眞の形を成就す。其母眠を好み。食を吞に下りがたきを覚ふ

九月の凶

母の左右の脇下に在て大に動く。母亦悶憂ふ。一夜に一升三合の乳味を飲といへり。重きこと山

のごとし

臨月の凶

胎形満足。手足自在に開く。此付きに至て降誕せんとする時ゆへ。母の慎深かるべし。産に臨

で賊風に吹れんことを恐る。地に産落ことなかれ

以上の箇所が、『絵入日用 女重宝記』の一部として、図版・解説ともにほぼ同じ形で用いられた部分である(当論考の後に載せた『絵入日用 女重宝記』翻刻と比較すれば、それが分かる)。

前述のように、『姪事戒』が刊行されたのは文化十二年(一八一五年)である。『絵入日用 女重宝記』が出版されたのが弘化四年(一八四七年)であるから、実に両書には十二年の隔たりがあることになるが、高井蘭山は『絵入日用 女重宝記』に自身の著を引用するに当たり、ほとんどその内容に手を加えていない。そこには、『絵入日用 女重宝記』が一般向けの書であることから、その内容が難解になり過ぎるのを避けたという側面もあるのかもしれない。

高井蘭山は『絵入日用 女重宝記』を編集するに当たって、自身が『姪事戒』に書いた論・図を挿入しつつ、それでも元禄五年版以降用いられていた『生下未分語』的図版を外さなかつた。このことは一見奇異に感じられるが、そこには、『姪事戒』の論・図と並べて両者を比較することにより、『生下未分語』的考え方の非合理性を浮き彫りにし、はっきり

と否定しようという意図があった。長々と『生下未分語』的な考え方の矛盾点をあげつらい、その後「次に出す医書に云胎内十月の図を見玉ふべし」として自説を披露していることからそれが分かる。

しかし、「文盲と愚痴と物に惑され理非にくらきと取のけざれば正道の理はしれざる也然らば懷妊の女中始月は錫杖二月めは独鈷を孕てあると思ひ不動様からしやか如来へ渡されたとおもいて信心有べし年来これにて済しこと也」なども書いていることから、依然としてこのような俗説が幅を利かせていた為、胎内十月図の影響を受けた図版を削除しにくかったのだとも考えられる。いずれにせよ、そもそも『女重宝記』は原刻版刊行当初から百科事典的性格を持っており、更に増補を繰り返すことによって情報量を増やし続けていた。その為『絵入日用 女重宝記』の時点に至るまで来て、敢えてそこで情報を減らす必要もなかったのである。

三、『女重宝記』と『熊野之御本地』

菊地仁氏が指摘するように、説経正本『熊野之御本地』の図版にも、『女重宝記』と同じように胎内十月図を出産図の上部に配置し、上下二分割の図版としているものがある⁽⁴⁾。この場面は、具体的には「こすいてん」(千ざい王の後、御衰殿)が九百九十九人の女御たちの奸計により御殿を追われて、山中で王子を出産した直後、官人に首を切られているところ

である。

この『熊野之御本地』には、板元は同じ鱗形屋孫兵衛だが板が異なる二種類が存在する。「熊野之御本地(江戸板)」東京大学総合図書館霞亭文庫蔵本⁽⁵⁾と「熊野之御本地」国立台湾大学研究図書館蔵本である。板は異なるが内容はほぼ同じである。鳥居フミ子氏は、「霞亭文庫本は宝永頃板行と推定されている。本書(台湾大学蔵本。——引用者注)の板行は、版式からみて、それより早く、元禄頃のように思われる」としている⁽¹⁾。

前述のように『熊野之御本地』と『女重宝記』はどちらも、上は胎内十月図、下は出産図という上下二分割の画面構成になっており、双方の間には明らかな関連性が認められるが、以下のような理由から、『女重宝記』の図版が『熊野之御本地』の図版に影響を与えた可能性が高いと言える。

『熊野之御本地』の出産図では、出産直後に切られた「こすいてん」の首を桶に入れようとしている場面が描かれているが、これは『女重宝記』で、生まれた子を盥に張った産湯に浸からせようとしている場面と構図が相似している。具体的には、屈んで「首/子」を「桶/盥」に入れようとしている人物のポーズ、またその人物と左右に控える人物との位置関係が共通している。

切られた首を桶に入れようとしている場面を参考にして、赤子を産湯に浸からせる場面を描くとは考え難い。この場合、

『熊野之御本地』が『女重宝記』の図を参考にしたと考えるのが妥当ではないだろうか。そう考えると、この二種類の『熊野之御本地』の成立は、少なくとも『女重宝記』原刻版が刊行された元禄五年以降ということになる。

『絵入日用 女重宝記』に含まれる二種類の胎内十月図(『女重宝記』原刻版の時点で『生下未分語』から直接影響を受けたと考えられる図版・『絵入日用 女重宝記』の時点で初めて『姪事戒』から引用された図版)を中心に、『絵入日用 女重宝記』本文におけるそれらの図版の扱い方、また『女重宝記』と他の様々な書物との関係性について考察を進めてきた。

独鈷を懐妊とからめた狂歌の類が少なくないことから、このような考え方が当時の庶民の間に深く浸透していたことが窺えるが、その背景には『生下未分語』や『女重宝記』等に含まれる胎内十月図や、それに類する図の存在があったのだろう。

四、翻刻

高井蘭山編・応為栄女画『絵入日用 女重宝記』弘化四年版の三之巻「くわいにんの巻子のそだてやう」の中から、懐胎に関わる「○懐妊の事ならびに養生の次第」「○懐妊か懐妊にあらぬかを知事」を翻刻した。翻刻に当たっては、『江戸時代女性文庫』58巻収録の影印(玉川大学図書館蔵本の

影印)を使用した。

『絵入日用 女重宝記』

〔書名〕 収録書名は外題による。

〔作者〕 高井蘭山(伴寛・思明)編・序。葛飾応為(栄)画。

〔年代〕 文政十二年(一八二九年)一〇月序。弘化四年(一

八四七)一月刊。江戸・和泉屋金右衛門板。

〔体裁〕 美濃判(二六三ミリ×一九六ミリ)。五巻五冊。第

一卷十三丁、第二巻十六丁、第三巻十七丁、第四巻

十五丁、第五巻二十一丁。

〔所蔵〕 玉川大学図書館蔵。

女重寶記 三之巻 くわいにんの巻子のそだてやう

○懐妊の事ならびに養生の次第

それ女十四さいよりはじめて月水通じ男八十六歳より始めて精水通ずと医書に見へたりよつてもろこしにはは三十ならざればをめとらず女は二十ならざれば夫に嫁せず其精を固くしてみだりにやぶらしめず嗣なからん事をおそれ也わが朝にては此法なく男十六七さいにてめとり女十三四にても嫁するならひとなりうへく方ほどはやく婚姻をとりおこなひ玉ふことになりぬこれみな親の心に我子の不義出来んことを思ひ気うつ労咳の症を煩はん事をおそれ婚姻をいそぐ也さるによつて男は若年にして子をまふけ子にをしゆる

すべをしらず女はいまだ初して子の親となり子を育てる法をわきまへず夫婦精固からぬ内にうみし子ゆゑ病者にて短命多し短命なる時は嗣たえて先祖のあとほろぶ不孝の第一也孟子と云賢人も後なきを不孝

とすとこのたまへり男の婦をもとむるは子をまふけ先祖のあとをたやさず家の内ををさめんため也何のわきまもなく色にまよひ愛におぼれて妻をもつは道にあらずよつて婦をさるに七ツの法あり子うまぬ婦其一ツなるにてしるべししかれども子をうむうまぬは其身の虚実によるものなればせひなき事なり稟継虚ければ子を孕ことなく。又実けれども血塊積聚帯下等のやまひ有て子をうまぬも有しかれば女とうまれては一生ひとり住ぬに極りわかき時か年たけてか一たびは人の婦となるものなればつねに身の養生を心がけ病なくくわいにんするやうにし玉ふべし懐妊してはなをく朝夕の養生食物以下まで心づけ玉ふべしくわいにんの間の養生下に別に書するしぬかく養生すれば病なきは本よりなり病有女は本ぶくし生質よわきはつよくなりていづれもくわいにんする世世の中をみるにいやしきものには子おほく大名歴ねがひ玉へども御子でき玉はず御妾たち子のあるべきを目きの上めしかへられかれ是御手かゝりても懐妊なきは宿縁のなき

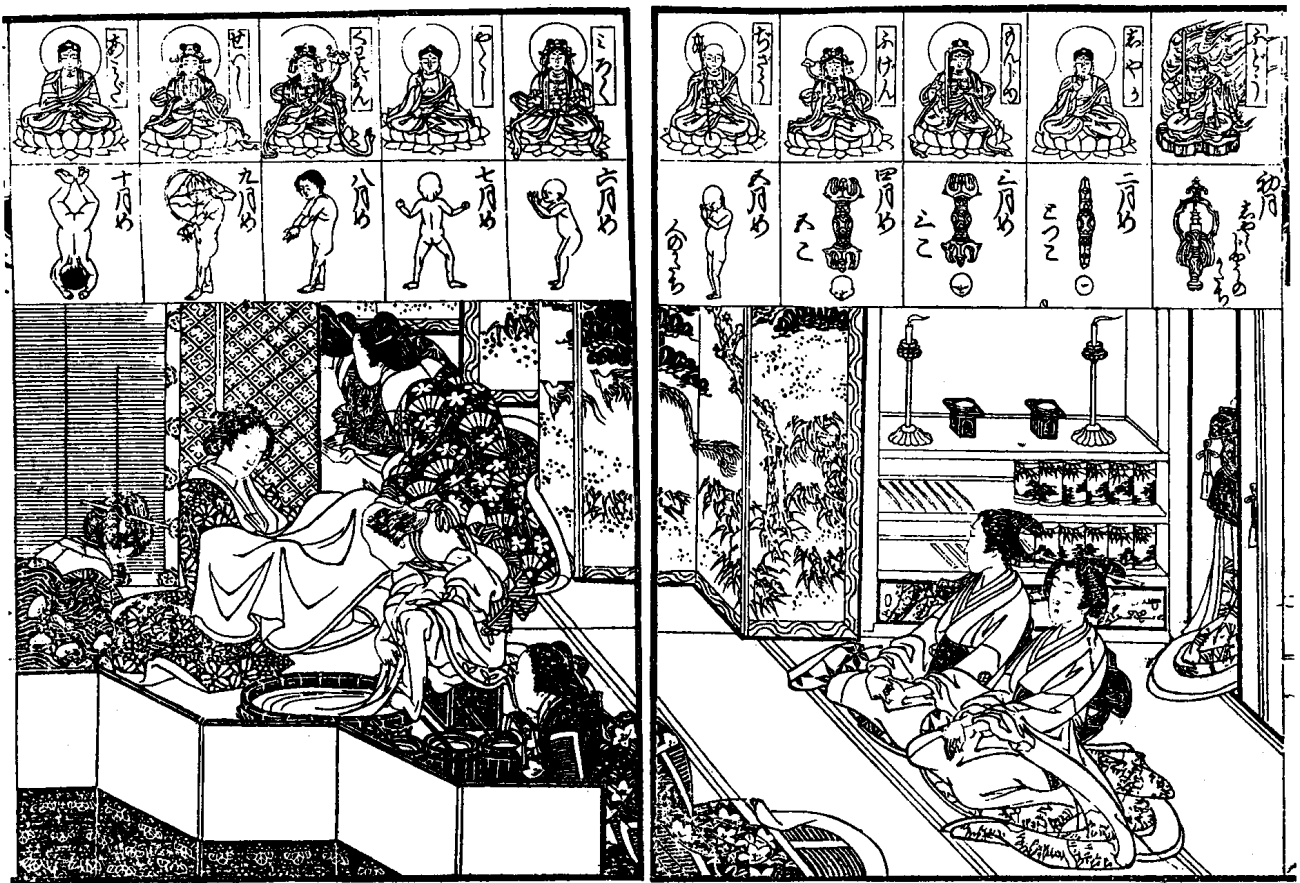
たねは末世擾乱なればかつてなく地ごくにうまるゝ餓鬼のたねはうんざいのごとく多ししかれば仏にはなりがたきことうへく方に御子のなきにてさと玉ひ女中がたはよのつねは申におよばすくわいにんのときはなをく仏神を信心し玉ふべしさあればうまるゝ子才智かしこく産もやすらか成もの也

○懐妊か懐妊にあらぬかを知事

川芎を粉にして壺刃艾葉の煎じ汁にてすきはらにのむべし其日腹の内すこしうずくやうにおぼえはそれ懐妊也うごかすばくわいにんにあらず病也又よき醋にて燃艾をせんじさかづきに半分ほどのむべし腹の内しきりにいたむことあらば是くわいにん也いたむことなくばくわいにんにあらず病也世上に懐妊初月より十月の間腹内にやどる所の子躰をなすかたち又毎月守り玉ふ仏有りて月々に次の仏わたし玉へば其仏又うけ取玉ふ不動明王より臨月阿弥陀如来におよぶ御事

(図一)

世上の女中信心に思ふ人むかしより多し女中方に学問して物の理をわきまへたるは甚まれなれば今さら何もいふに及すされども物物の理合わかりて腹の中に仏具やどり三鉢五鉢より人となる奇怪の事にて左様の理有まし又我は日本国神の御裔の人なれば天竺の仏が十月の間かはり番に請取て守るべきいはれなし一日の内に何万人うまるゝかし



(図1)

られぬ人を神通にもあれわづかの仏にていく千万人を毎月
まもるとは理にもあたらぬことかな又人々の守り本尊といふ
ものが有なら日本数万人御恩をかうむらざるは老人もなき
恐ながら日光様か扱は主人か両親は其身の守本尊も有べき
日本国神の御裔にうまれよその国の仏が守り本尊なるへき
はづはなしと心をけつちやうして見玉はゞ次に出す医書に云
胎内十月の図を見玉ふべし仏道の信心者にて日輪も阿弥陀と
思ひ七月廿六夜の月の出んは本尊の弥陀を拝すると思ふ人に
は無用也文盲と愚痴と物に惑され理非にくらきと取のけざ
れば正道の理はしれざる也然らば懐妊の女中始月は 錫杖
二月めは独鉦を孕てあると思ひ不動様からしやか如来へ渡
されたとおもいて信心有べし年来これにて済しこと也医書に
いふ所は

(図二)

〈以下、図二の解説文〉

初月の図 一てんのしらつゆをくさのはにとめたることしし
よくをとりにて風の中になつごとしかぜきびしけれ
ばつゆとどまらざるにたり子壺にあつていまだ
はらにいらす

二月め
るんもんのうち六寸にありてはらにはいらたれと
もいまだまことのところにおらず其かたちものは
なのはじめてほころぶるがごとしかたちもろくし
てかたまらざるなり

此月このつきうむこと有手ありてあてよければそだつもの也
病身ひやうしんおほ多し

九月め

はゝのさゆうのわきばらにあつておほひにうごく
母ははいよくもだへうれふ一夜やに一升しやう三合がふのちゝを
のむといへり其そのおもきこと山やまのごとし此月このつきにうま
るゝはそだちかたきものなり諺ことわざに八月やつき子はそだ
ち九月このつき子はそだたずと

十月め

たいのかたちみちたりてあしじざいにひらく此月このつき
にいたつてたんじやうせんとする時ときゆゑ母ははのつゝ
しそふかかるとべしさんさんにのぞんであしき風かせにふか
れんことをおそる地ちにうそおとさぬやうに心こころづ
け大切たいせつにすべし

注

- (一) 桜井由幾氏「生下未分語 解題」『江戸時代女性文庫 88』
(大空社 一九九八年六月)
- (二) 『日本古典文学大辞典』四卷(岩波書店 一九八四年七月)
による。
- (三) 『江戸時代女性文庫 76』所収の「姪事戒」(大空社 一九九
八年六月) 影印のうち、当該部分のみを筆者が翻刻。
- (四) 菊地仁氏「胎内十月図」の由来 — 熊野の本地 — 譚との接
点から — 徳江元正氏編『室町芸文論攷』(三弥井書店 一九
九一年十二月)
- (五) 横山重氏校訂『説経正本集 第一』(角川書店 一九六八年

二月)に翻刻・解説されている。

(六) 鳥居フミ子氏『近世芸能の発掘』(勉誠社 一九九五年二月)
に影印で収録・解説されている。

(七) 鳥居フミ子氏「熊野之御本地」書誌『近世芸能の発掘』(勉
誠社 一九九五年二月)

(八) 「絵入日用 女重宝記」『江戸時代女性文庫 58』(大空社 一
九九六年十一月)

図版出典

図一・図二……「絵入日用 女重宝記」『江戸時代女性文庫 58』
(大空社 一九九六年十一月)の内、「三之巻 くわいにんの巻子の
そだてやう」一番目、二番目の図。

付記 注で示した以外の参考文献

「女重宝記大成」山住正巳氏他編注『子育ての書』一卷(平凡社
東洋文庫 一九七六年二月)

近世文学書誌研究会編・小川武彦氏解題『近世文学資料類従 参
考文献編 18 女重宝記他』(勉誠社 一九八一年十二月)

長友千代治氏校注『元禄若者心得集 女重宝記・男重宝記』(社
会思想社 一九九三年十一月)